

# 公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

## 研修報告書 (2017年度 助成者)

作成日 2017年11月12日

氏名 (フリガナ)	大和田 真紀 (オオワダ マキ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2017年10月8日(日)～10月14日(土)
所属機関名	獨協医科大学病院
身分	看護師

アメリカでは慢性疾患を抱えた高齢化が進み、医療保険制度や多民族社会であることなどが問題となっている。医療者も減少しており、特に看護師不足が予測されている。看護師の業務範囲は州ごとに異なり、働き方も多様である。看護助手やメディカルアシスタントなどの職種があり、トリアージナース、チャージナースという役割を持って勤務する看護師がいるなど、分業化、専門家が進んでいる。看護師は、病院ではなく病棟と雇用契約を締結するため、看護師長が採用の権限を持っている。アメリカでも看護師の離職防止対策には力を入れており、病院の風土や理念に合う看護師を見極めることも師長の大切な役割である。

臨床では、**Nursing Professional Development** と呼ばれる継続教育が行われている。看護師が安全に安心して働ける職場環境や、看護師としてどのように前進していけるかを指すものである。自分たちの働く病棟でどのようなケアができるのかを日々の業務の中から情報収集し、その結果に基づいて現場の体制の見直しを行う。変化をもたらすプロセスには困難を伴うこともあるが、最新のデータに基づいて現場改善や看護実践を職員全員で行うことで看護の質も上がる。看護師の安全を確保することが患者の安全につながり、患者満足度を上げることができる。患者満足度は、患者が病院を選択する基準や治療を受ける際の安心感になるが、職員にとっても仕事への意欲を向上させる指標となる。看護師ひとりひとりが経営に参画することになるため、組織としても発展を遂げられると学んだ。今回の研修でお会いした講師やスタッフの方々には、意欲を持って働いているのが感じられ、生き生きとした表情が印象に残った。患者中心の医療は、患者に必要なケアを多職種が協力して提供することだけでなく、施設設備や環境、組織なども患者の立場に立って整備されていた。

ポートランド大学看護学部ラーニングリソースセンターの患者ロボットシミュレーションセンターでは、現場で急変に直面した際に落ち着いて対応できることを目的としたシミュレーション演習が行われていた。シミュレーション教育は、経験のある教員が、発汗や出血などのできる高性能な患者ロボットをコントロールルームでモニターしながら行われる。シミュレーション後は、学生同士がグループディスカッションを通して学びを深めていて、看護学部の教育水準は非常に高いと感じた。臨床実習を行う際も学生のスキルに合わせたプログラムが計画されており、学生の時から臨床を意識した教育が行われていると感じた。

私は社会人経験後に看護師を目指し、現在は大学病院に勤務している。看護師はアメリカでも人気のある職業のため、セカンドキャリアとして看護師を目指す人が多いと知り、とてもはげみになった。これまでの経験を看護に活かせるという強みがあると実感できて、自信につながったとも感じている。アメリカの看護師は臨床に出ると即戦力を求められる。新人教育にも力を入れているが、看護師としての役割を最大限に発揮するためには、まだできることがあり、看護師個人が役割行動や能力を発揮することが求められていることも学んだ。看護師として何を期待されているのか、自分に何ができるのかが明確になることで、やりがいを感じるができる。ケアの結果が見えやすくなれば、さらにケアの質を向上させたいと考えて実践するようになる。患者の立場に立ち、患者が何をしたいのかを見極めて同調することが看護師としての礎であることを学ぶことができた。日本の看護の患者を把握しやすく細やかな気配りが行き届きやすいという良さをケアに活かしながら、看護師としての能力を発展させて、患者中心の医療を実現していきたい。